

2種類の羊

マタイ18：7～14 エペソ：1～13

遠藤 一則牧師

序論：

パウロはその大きな働きにも関わらず、自分のことを「一番小さい者」だと言いました。わたしたちはとにかく、自分の外見、業績、強運のようなもので自分を評価し、恐ろしいことにその反した刀で他人を裁いてしまいます。

しかし、私たちの主はわれわれとはまったく違う評価基準を持っている、というかヘタをすると評価そのものもまったくしておられないのではないだろうか。

人は習慣の動物である、いつもそのように行動するとものごとのやり取りがすべてその色に染まっていきます。学校では成績、職場では業績、人間関係では損得勘定がいつも頭の中で渦巻いてしまいます。

パウロはそのような世界の基準では大した人間でした。家系、才能、財力、人間性、すべてにおいてユダヤ人国家においてのみならず、ローマ人国家においても通用する市民権を生まれながらに持っていました。

その彼が自らを一番小さい、と宣言しているのです。何でこんなことを言ったのでしょうか。今日はそれをテーマにお話したいと思います。

I. 一番小さいものについて

普通「自分が一番小さい。」という人は、謙遜な人です。といたいところですが、どうかなー？とってしまいます。なぜか？わたしにとってはうわべだけの謙遜ほどえらそうなものはないと思えるからです。なぜなら自分自身がそうだからです。

私の場合、「もし自分が一番小さい」と言ったとすれば、自分を守るために言っている、というケースがほとんどでした。みなさんはどうですか。本当に自分が一番小さいと言えますか。私は言えません。例えば、ここで皆さんの前にメッセージしていますが、やはり皆さんにしっかりと聞いてほしい。少しはためになる話ができたらいいな、という怪しい下心が自分の中にあるからです。だから「あなたのメッセージはつまらん。」とか「わからん。」とか言われると少なからず、傷つくような気もするのです。あなたはどうですか。自分の人格をこきおろされたり、自分が大切にしているものをはずかしめられたりしたら、頭にくるでしょう。ですから、私自身は「自分が一番小さい者」と言う時でも、ある意味自分を守るために言っているのであって、本心からなどとは口が裂けても言えてないわけです。

II. サウルとパウロ

自分で書きながら誰かに似てると思いました。そうです、サウル王様です。

サムエル記Iの9：21、10：21、ここでサウルは自分を小さいと言っています。でもこれは恐れが原因です。恐れによって支配された謙遜は何か変です。その背後には、ねたみと苦い思いが渦巻いているといえるでしょう。これは自分を守るための謙遜傲慢と言い換えてもいいと思います。

パウロの場合はどうでしょう。こちらは本当に自分が一番小さい、と思っただけかもしれませんが、自分を守るためではありません。自分が一番小さいなんてことは人に指導する立場の人はなかなか言えないし、言っただけが常識です。しかし、彼はある意味堂々と私はすべての人の中で一番小さいものだ、と言い切ったのでした。なぜでしょうか。彼はもともと小さくなかったからこういう必要があったのです。なぜそうする必要があったのか。おそらく、これはエペソをはじめとする他の兄弟たちへの「愛の表れ」、愛を示したかったんじゃないでしょうか。私にはパウロが自分を低く見せるためにこんなことを言っているのではないのだと思います。そしてこの「愛の表れ」も結局は、自分が同じ愛を受けたからこそできる主イエスからの「手渡しの愛」だったのではないのでしょうか。イエスはご自分のことを小さいものだとは言いませんでしたが、小さくなられました。主は全宇宙の創り主、いわば王様でした。しかし、この地上では大工の子となり、普通に働かれました。

Ⅲ. 一匹の羊

さて少し話は変わります。わたしたちは普段、「伝道に行こう」とよく聞くかもしれませんが、しかし、本当に伝道に行く気は出るのでしょうか。なかなか腰は重たく、いろいろな要因が重なって気が乗らないということもあるのではないのでしょうか。しかし、失われた羊を誰かが探しに行かなくては、という思いには駆られます。特に牧師をはじめとする説教者に「伝道しましょう！」と言われたら、はっきり言って疲れます。でも日本人なのでがんばって行くかもしれません。もちろん心奮い立って伝道にいける人はどんどん行けばいいのですが、全員そうなるというわけにもいきません。

それにしても、マタイの福音書の中で羊を探す、伝道に行くのは誰でしょうか。明らかに持ち主です。この持ち主とはもちろん神様です。ということは一匹の羊を探している、伝道しているのは神様、特に主イエスだということになります。私でもあなたでもありません。

Ⅳ. 九十九匹の羊

では私たちは一体誰なのでしょう。主が一匹を探しているときに何をしているのでしょうか。九十九匹の羊が出てきますが、このたとえ話ではこれはユダヤ人を直接指していると思います。ただ今日は、私たちが九十九匹の羊だと仮定しましょう。この九十九匹は何をしているのですか。待っています。どこにも行きません。そして、羊の持ち主が一匹を見つけてくるのをおとなしく待っているのです。もし、九十九匹の一匹がはりきって出かけたらどうなりますか。迷子の羊が二匹になるのではないのでしょうか。探しに行くのはあくまでも主イエスです。では九十九匹の働きは何か？これは一匹が戻ってきたときにこれを喜び、迎え入れるということでしょう。私たちもかつては一匹の羊であったのですから。伝道ははじめから最後まで主の働きなのです。

結論：相手を縛らない愛

さて話を元にもどしましょう。パウロも主イエスも、なぜ小さくなる必要があったのでしょうか。なぜ侮られるほどに小さくなられたのでしょうか。私はこう思います。私たちに自由を与えるためだと。

人は人を動かしたいときにどうするのでしょうか。普通は説得する、時には脅す、褒美をあげる、いろいろな手練手管が考えられますが、もし私が偉い人間、才能あふれる、肩書きがある、金がある、権力がある、カリスマ性があるとして、そのような立場からみなさんに命令したとしたらどうでしょうか。たちまち言うことを聞くでしょうね。そしてたちまち、ピラミッド構造を築き、権力による形ばかりの従順を求めるようになるでしょう。

私が主のことを全力で伝えるとどうなるでしょう。説教くさくなります。そして、無理やり信じさせることになります。また、もしかしたら他の「有名な説教者」と呼ばれる人たちも本人にその気がなくても結果的に強制してしまうこともあったのではないのでしょうか。しかし、主は違いました。信じない自由をいつも相手に与えていました。私たちの主はどんな奇跡を行っても、どんなすばらしい話をして、最後には必ず従わない道を残しておられました。私はそこに主の愛を感じるものであります。主はもちろん私たちに主の働きを続けてほしいと願っています。しかし、私たちがそれをやらないことも想定内なのです。そして、それでも敢えて十字架にかかってくださったことに大いに感謝したいのです。